

都道府県別賞一等

家族の絆

福岡県 東福岡自彊館中学校 一学年

嶋村 風紗

「生命保険」。これは、私にとって身近なものではなかった。ところが、大好きな祖母に肺ガンが見つかった。ステージⅣだった。そこから保険が、身近なものになったのだ。

私の祖母はとても優しく、家族や友達、たくさんの人に愛されていた。私はそんな祖母が小さいころから大好きだった。祖母が住んでいる広島へ新幹線で帰ると、いつも改札を出たところに祖母が待っていてくれた。私は、祖母を見つけた途端に走って行き、抱きついていたのをよく覚えている。私の誕生日にはたくさん洋服やおもちゃや本、メッセージカードが毎年届いていた。私は祖母から、たくさん愛情をもらった。

そんな祖母に突然のガン宣告。余命三カ月と診断された。母から聞いたが、ショックすぎてあまり覚えていない。そこからすぐに入院が決まり、色々な検査、放射線治療も行ったが、祖母の「家族と過ごしたい、家に帰りたい。」という希望から自宅で緩和ケアをすることになった。春休みに入り、私は母と広島へ帰り、家族で過ごすことになった。しかし、自宅で祖母が家族と過ごせたのはたったの一カ月だった。

祖母が家に帰ってきて、緩和ケアが始まった。食欲が減り、祖母が食べやすいものや、食べたいものを聞いたり、家族で相談したりと、色々な話をした。時には、祖父と母の姉がけんかをすることもあったが、祖母のことを一番に考えていたからだろう。体調によっては訪問医や看護師さんと呼ばなければいけないこともたくさんあり、心配は尽きなかった。けれど、お金のことを気にせず、祖母のことを第一に考えて過ごすことができたのは祖母が生命保険に加入していたおかげだった。

保険の仕組みを、作文をきっかけに、初めて知った。保険は加入した人の保険料を公平に負担し合い、万が一のことが起こった時に給付を受けることができる仕組みだ。祖母のように、悲しいことは突然起こるものだから、それに備えておくことの大切さに今回の作文を書いたことで気づくことができた。

祖母は、病気がわかって三カ月で旅立ってしまった。祖母にはもつと生きてほしかった。広島に帰った時には、「おかえり。」と出迎えてほしい。祖父は、「お金はいらないから母さんを返してほしい。」と言っていた。命はお金にかえられないのだ。しかし、この仕組みがあるからこそ、治療を受けることができ、

第63回中学生作文コンクール

助かる命があることや、最期の時間を家族と一緒に過ごせるのだと思う。私は、祖父がお金のことでも悩む姿を一回も見なかった。葬儀も含め、祖母を家族みんなで見送ることができた。もし、生命保険に加入していなかったら、祖母にづらい思いをさせるだけでなく、家族みんな別の不安も抱えながら過ごしていただろう。

祖父や母、母の姉と私の関係は、以前よりも仲が深まったように感じる。それは、家族みんなで心を合わせ、祖母のことを大切にし、見送ることができたからだ。そして、生命保険の力が少なからずあるはずだ。万が一のことは来るかもしれないし、来ないかもしれない。来ないことが一番いいが、祖父がそうしていたように、生命保険の力を借りることは、家族を支え、守り、絆を深めることにつながるのではないだろうか。